



第53回えひめこども美術展

1973年度の第1回開催から今年度で53回目を迎えた「えひめこども美術展」は、図画工作・美術や国語を担当されている多くの先生方の協力のもと実施しています。愛媛の幼児・児童・生徒が豊かに表現した絵画、立体、書写の作品を発表する本美術展の特徴は、教育現場の授業等で生み出された子供たちの多様な表現を、先生方の協議によって審査し、地域社会との連携協力を得て展覧会を実施している点にあります。

今年度も、令和8年1月4日から14日まで愛媛県美術館南館で展覧会を開催し、約4,600人の来場者に作品を見ていただきました。また、令和8年1月10日には愛媛県県民文化会館で約3,000人が参加する表彰式を実施しました。

学校の先生方と教育委員会、そして各教育団体や民間企業が一体となって実施している本美術展の取組から、日頃の指導や授業改善で大切にしたいポイントを見いだすことができます。

子供理解に基づく評価と指導の在り方の振り返り —審査会の取組より—

本美術展では、まず、各学校等で一次審査が行われ、応募作品が選ばれます。次に、地区審査が行われ、約5,000点の入選作品が選出されます。その中から、更に、中央審査において、約1,000点の特選作品が決定されます。中央審査の会場一面に作品が並ぶ光景は圧巻です。審査は、子供がどのような思いを作品に込めたか、どのような工夫をしたかといった制作の過程に加え、題材が発達段階にに応じているか、指導事項が学習指導要領に照らして適切であるかといった観点も踏まえて進められます。審査に携わる先生方が熱心に協議し、子供たちの取組を丁寧に読み取っていくことで、教科で大切にすべきことの共通理解を図る貴重な研修の場になっています。



発達段階の理解と学びの連続性 —展覧会の取組より—

特選作品は、全て愛媛県美術館に展示されます。第一展示室では、幼児から順に各学年の作品が数点ずつ展示されます。また、本美術展の対象ではありませんが、高校生の作品もいくつか紹介されます。幼児から高校生までの発達段階が一望できる構成となっており、一人一人の思いやその時期に大切にしたい経験が自ずと感じられ、担当している学年や学校種



を超えて、長期的な視野をもって指導に当たる重要性を実感できる場となっています。

子供の主体性を育む「共に創る」教育 ―表彰式の取組より―

図画工作科や美術科の学習は、決して完成度の高い作品をつくることを目的にしているわけではありません。活動や作品づくりは、子供が自分にとっての意味や価値をつくりだすことです。だからこそ、子供自身が学習の過程を振り返り、意味付けることが大切になります。その際、友達、先生、地域や社会の人々など、様々な人との関係性の中で活動することができれば、子供たちは大きな充実感を味わうことができます。

美術館と連携した展覧会や、多くの先生方と保護者等が関わる表彰式は、子供のつくりだす喜びや、表現及び鑑賞をすることへの自信につながる大切な場です。今年度の表彰式においても、代表児童生徒が作品についての感想を発表しました。制作時の思いを語ってもらうことで、会場内の子供たちはもちろん、参加している先生や保護者も、「主題を生み出すこと」「色や形に着目すること」「意図に応じて創造的に表すこと」など、教科で育成を目指す資質・能力について共有する貴重な機会となりました。



段ボールの片面をはいで波段ボールにして、丸めたり折ったりして、遊具を作りました。丸めてボンドでつけるのがむずかしかったです。アスレチックランドが出来上がると、そこで楽しく遊んでいる人を作りたくなりました。ロープをこわごわ歩いている人、トンネルからのぞいている人、みんなの楽しい笑い声が聞こえてきそうになりました。

(小4)

【代表児童感想より】



この絵を制作するときに、特に頑張ったところは、山の描き方と物置きの描き方です。山は同じような色が並んでいたのでも、少しずつ色を変えて表現しました。物置は、様々なものがあって、それぞれで色を分けたり、影を付けて描いたりするのが難しかったです。完成したときには、達成感があり、すごくうれしかったです。

(中2)

【代表生徒感想より】

令和7年9月、中央教育審議会教育課程企画特別部会で取りまとめられた「論点整理」が公表されました。現在、各教科等についても、学習指導要領実施状況調査の結果等を踏まえながら、ワーキンググループにおいて議論が進められています。

各教科等それぞれに、その教科等で育成すべき資質・能力があります。学習指導要領改訂を前に、改めて各教科等で大切にされていることを確認し、教育活動の一層の充実に努めていただきたいと思います。